

2020年11月8日 久宝教会 降誕前 第7主日礼拝

メッセージ「業績主義から解放されて生きる」 牛田匡牧師

聖書 ガラテヤの信徒への手紙 3章1-14節

先週の11月1日には、大阪市廃止の住民投票が行われました。大阪市民ではない私にとっては、ヒヤヒヤしながら眺めていることしか出来ませんでした。が、^{きんさ}僅差の反対多数で大阪市の存続が決まりました。今回の住民投票の意味や目的をどれだけの人が理解していたかは不明ですが、マスメディアの報道の仕方は終始おかしく、「大阪市廃止」の住民投票であるにも拘^{かかわ}らず、ずっと「大阪都構想」の住民投票と言いつけていました。仮に大阪市の廃止されても、すぐに大阪都になるわけではなく、そのためにはそもそも法改正が必要で、国会で扱われなければならない事柄だそうですが、それらを見做して、「大阪都構想」と言いつけていたのは、「維新の会」の政治家たちとマスメディアが一緒になって、市民を故意に^{だま}騙そうとしていたように思えてなりません。

大阪市の住んでいる約12万人の在日外国人の方々には、今回も投票権は与えられませんでしたし、大阪市の特別区に再編するというのは、市内の地域格差を見做して強引に4つに分け、それぞれの特別区に「自弁・自活・自助していきなさい」というようなもので、「府と市の二重行政を無くす」という名目の下、ますます弱者切り捨てる姿勢が強く打ち出されていました。

政治家たちは威勢のいい言葉を使って、「既得権益を破壊する」「自分たちは改革者だ」と言います。すると今まで既得権益の側にいない人たち、ずっとしんどい思いをさせられて来た人たちは、「そうだそうだ」と言いたくなります。しかし、そのリーダーたちが言う「既得権益の破壊」とは、誰のため、何のためなのでしょう。どこに立って、どこから発言した言葉なのかをよく見極めなければ、既存の権力が引きずり降ろされる様子を眺めて、一時的に胸がスッキリしたとしても、それはごまかしに過ぎず、気

付くと自分たち自身にまで破壊の刃は向けられて来るのではないかと思います。

今から90年前、日本が戦争に向かおうとしていた時代も、急に戦時体制が始まったわけではなく、多くの人々が日々の暮らしを送っていた中で、少しずつ事態は進行して行ったのでしょう。ジャーナリズムもいつの間にか政府の宣伝機関になってしまいました。私たちが暮らしている現代もまた、同じような状況になってしまっているように思えてなりません。「今、自分たちが苦しいのは、あそこにいる誰かのせいだ」と言って、特定の敵を作り、その敵をやっつけることに全力を挙げる……。そんな生き方には平和はありません。他人を差別し、自分に都合の悪い相手を敵と見なすような心、自分の中にある心こそが、敵を作り出しているのではないのでしょうか。

今回の聖書の言葉もまた、そのように律法に定められた掟を守っているかどうかで人を裁き、その業績で人を評価するという人々の在り方に対して、パウロが書き送ったものでした。パウロが宣教旅行の中でガラテヤ地方に立ち寄り、その地にイエス・キリストを信じる人々の群れが出来ました。しかし、その後そのガラテヤの異邦人教会に対して、エルサレムのユダヤ人教会から「アブラハムの子孫に約束された祝福を受けるために、律法に定められた掟を守ることが大事だ」という教えが入り込んでいたようです。パウロはそのようなガラテヤの教会の人々に対して手紙を送り、明確に反論しています。

3章の1節では「ああ愚かなガラテヤの人たち」と言っています。関西弁で言えば「あんたらアホちゃうんか」と言うわけですが、何故そんなことを言っているのかというと、それは「十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前にはっきり示されたのに」と言っています。この「十字架につけられた」は、単なる過去形ではなく、現在完了の受け身形です。昔の文語訳では「十字架につけられ給ひしままなるイエス・キリスト」と直訳されていますが、それこそカトリック教会に掲げられている十

十字架のように、イエス・キリストは今もなお十字架の上につけられたまま、十字架に架けられ続けているということです。パウロには、福音書に記されている十二弟子たちのように、イエス様と一緒に旅をし、飲み食いをしたという経験はありません。彼が出会った復活のイエス様は、いつでも十字架とセットだったのでしょう。

当時のローマ世界において、十字架は神の救いの象徴ではありませんでした。十字架は処刑、見せしめの道具であり、現代の感覚で言えば絞首刑の絞首台や、ギロチン、断頭台と同じようなものでした。パウロは13節で「木に掛けられた者は皆、呪われている」とヘブライ語聖書（申命記21：23）を引用していますが、当時の人々にとっては十字架は残酷な処刑道具であり、神様から見放された人のもの、呪われた死の象徴でした。

イエス・キリストが今もなお十字架の上に掛けられているとは、正真正銘「殺された」ためです。何故イエス様が殺されたのか、それは「守り切ることのできない律法」の故です。10節にあるように「律法の書に書いてあるすべてのことを守らず、これを行わない者は皆、呪いの下にあります」と言いつつも、当時の権力者、宗教指導者たちは自分たちのことは棚上げて、他人の罪、律法違反、掟の不履行ばかりを指摘し、断罪していました。そしてそのことをイエス様に糾弾されたので、イエス様を十字架に架けて殺しました。つまり律法の掟そのものに、守り切ることが出来ないという限界があり、人を裁かずにはいられない仕組みになっている、ということでした。

今回の招きの詞は、洗礼者ヨハネがユダヤ人たちに語った言葉でした。「我々の父はアブラハムだ。だから我々は大丈夫だ、救いが約束されている聖なる民だ、などと思いがってはいけない」ということです。「律法を守る者がアブラハムの子孫だ」という教えを伝え聞いたガラテヤの人々に対して、パウロは述べています。7節です。「信仰によって生きる人々こそアブラハムの子孫です」。そして神がアブラハムに対して「すべての異邦人があなたによって祝福される」と約束したのは、異邦人たちが律法によってではなく信仰によって義とされるためであったとも述べています。

キリストの十字架は、律法の限界、不完全さ、無力さを私たちに示し、私
たちをその呪縛から贖^{あがな}い出し、解放してくれるものでした。それによって、
私たちは「律法を守れているから正しく、守れていなければ正しくない」
「自分の方が人よりもきちんと守れているから、自分の方が優れている」
というような自他に対する裁きと評価、業績主義から解放されて生きること
が出来るようになりました。

私たちは意識しているか意識していないかに関係なく、全員が今なお差別
と暴力の社会の中に生きています。かつての「社会主義」という壮大な
社会実験は、大きな暴力を生み出して失敗だったと考えられています、
現代の「資本主義」(新自由主義)もまた人間を疎外し、格差と差別と暴力
を生み出しています。たとえ今は他人を裁く側にいて、他人に暴力を振る
う側にいたとしても、いつその立場から転がり落ちるかは分かりません。
他人に対して振るっていた暴力が自分自身に向けられてくるのではないか、
と人々は常にビクビクしながら息を詰めて暮らしています。そのような社
会が平和な社会でしょうか。神様から与えられている命が、祝福され、活
き活きと生きられている世界でしょうか。

もちろん、そんなはずはありません。しかし、そうは言っても、この社会
の中で、ますます業績主義が幅を利かせる時代の中で、どうやって行けば
よいのでしょうか。そんな私たちに聖書は語っています。「十字架につけら
れたままのキリストが、目の前に見えるじゃないか」。律法に定められた掟
を守る事が出来ているか出来ていないかという業績によって、神様からの
力、聖霊が与えられるのではありません。神様の力は、世の無力な所、無価
値な所、小さくされている所にこそ現われます。信仰の人アブラハムが、
神に信頼して歩みを起こしたように、私たちも今それぞれが置かれている
所から、一歩ずつ歩み出して行きたいと願います。十字架によって業績主
義に終止符を打ち、そこから解放された生き方、全ての命を大切にし合う
生き方へと、イエス・キリストは十字架の上から私たちに今日も招いて下
さっています。